

令和6年度病虫害発生予報第9号の発表について

このことについて、次のとおり発表したのを送付します。

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生量
カンキツ	カイガラムシ類 (ナシマルカイガラムシ、ヤノネカイガラムシ等)	並
	ミカンハダニ	やや多
モモ	カイガラムシ類 (クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ等)	並
カキ	フジコナカイガラムシ	やや少
	カキノヘタムシガ	やや少
ブロッコリー	黒腐病	やや少
	花蕾腐敗病	やや少
	べと病	やや少
	菌核病	並
レタス	灰色かび病	やや少
	菌核病	並
	腐敗病	やや少
	斑点細菌病	やや少
	モザイク病	並
イチゴ	うどんこ病	並
	アブラムシ類	やや多
	コナジラミ類	並
	ハダニ類	並
野菜、花きの 共通害虫	ハスモンヨトウ	やや多
	コナガ	やや少
	タバコガ類	やや多

太文字の病虫害：向こう1か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

*予報根拠中の記号

- (+)：発生量を多くする要因
- (-)：発生量を少なくする要因
- (±)：発生量が平年並になる要因

令和6年度 病害虫発生予報 第9号(12月)

A. 果樹の病害虫

ーカンキツー

1. カイガラムシ類(ナシマルカイガラムシ、ヤノネカイガラムシ等)

予 想 発生地域：県内全域

発生量：並

根 拠 秋期(9～11月)のナシマルカイガラムシの発生は平年と同様に認められなかった(±)、ヤノネカイガラムシの発生は平年と同様に認められなかった(±)。

- 対 策 (1) 越冬期の密度を下げるため、冬期防除(寄生密度の高い枝の切除やワラ、ブラシなどでのすり落とし、マシン油乳剤の散布)を行う。
(2) マシン油乳剤の散布は晴天の続く風のない日を選び、散布むらのないように丁寧に行う。なお、樹勢が弱い樹では散布を避ける。

2. ミカンハダニ

予 想 発生地域：県内全域

発生量：やや多

根 拠 (1) 一般圃場での11月下旬の発生量は多かった。(+)
(2) 12月の気象は気温がほぼ平年並(±)、降水量が平年並か少ない(+)予報である。

- 対 策 (1) 越冬期の密度を下げるため、冬期にマシン油乳剤の散布を行う。
(2) マシン油乳剤の散布は晴天の続く風のない日を選び、散布むらのないように丁寧に行う。なお、樹勢が弱い樹では散布を避ける。

ーモ モー

1. カイガラムシ類(クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ等)

予 想 発生地域：県内全域

発生量：並

根 拠 (1) 一般圃場での秋期(9～11月)の枝での発生量は平年並であった。(±)
(2) 防除員報告では発生がやや多い地区があった。(+)

- 対 策 (1) 越冬期の密度を下げるため、冬期防除(寄生密度の高い枝の切除やワラ、ブラシなどでのカイガラムシのすり落とし、マシン油乳剤の散布)を行う。
(2) マシン油乳剤の散布は晴天の続く風のない日を選び、散布むらのないように丁寧に行う。なお、樹勢が弱い樹では散布を避ける。

ーカ キー

1. フジコナカイガラムシ

予 想 発生地域：県内全域

発生量：やや少

根 拠 (1) 一般圃場での秋期(9～11月)の枝での発生量は認められなかった。(－)
(2) 一般圃場での秋期(9～11月)の果実での発生量は平年並であった。(±)

- 対 策 (1) 越冬期の密度を下げるため、冬期防除(寄生密度の高い枝の切除やワラ、ブラシなどでのカイガラムシのすり落とし、マシン油乳剤の散布)と1月から2月に粗皮削りを実施する。
(2) マシン油乳剤の散布は晴天の続く風のない日を選び、散布むらのないように丁寧に行う。

2. カキノヘタムシガ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 一般圃場での秋期(9～11月)の発生は認められなかった。(一)
- 対 策 越冬期の密度を下げるため、1月から2月に粗皮削りを実施する。

B. 野菜、花きの病害虫

ーブロッコリーー

1. 黒腐病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 11月下旬の年内どり、年明けどりとともに平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 12月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)
- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に7～10日間隔で行う。害虫の食害痕等からも病原菌が侵入するので害虫防除を徹底する。
(2) すでに発生している圃場ではオキシリニック酸やカスガマイシンを含む薬剤を散布する。
(3) 強風を伴う降雨が続いた後には薬剤防除を実施する。

2. 花蕾腐敗病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 11月下旬の年内どりでの発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 12月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)
- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施する。
(2) 降霜などによって発病が助長されるので、低温が予想される場合には防霜対策を施す。

3. ベと病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 11月下旬の年内どり、年明けどりとともに発生は認められなかった。(一)
(2) 12月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)
- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素過多にならないよう肥培管理する。
(2) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぐことによって散布回数を減らすよう努める。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. 菌核病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 11月下旬の年内どり、年明けどりとともに発生は認められなかった。(一)
(2) 11月の気象は気温が高く経過した。(＋)
(3) 12月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(一)
- 対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
(2) 圃場の排水を良くする。
(3) 発生の多い圃場では連作しない。

- (4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーレタスー

1. 灰色かび病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりで発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 12月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
(3) 薬剤散布は株元を中心に、丁寧に行う。
(4) 苗床からの持ち込みも多いので、苗床での薬剤防除を実施する。
(5) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. 菌核病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりで発生量はやや少なかった。(－)
(2) 11月の気象は気温が高く経過した。(＋)
(3) 12月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)

対 策 (1) 発病株は早期に発見し、抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分し、直ちに防除を行う。
(2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
(3) 灰色かび病防除に準じて対策を行う。
(4) 灰色かび病の耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(5) 発生の多い圃場では連作しない。

3. 腐敗病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりで発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 12月の気象は気温がほぼ平年並(±)、降水量が平年並か少ない(－)予報である。

対 策 (1) トンネル被覆は遅れないようにするとともに、被覆前には薬剤防除を行う。
(2) 凍霜害にあった場合は速やかに薬剤防除を行う。
(3) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。

4. 斑点細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 11月下旬の年内どりで発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 12月の気象は降水量が平年並か少ない予報である。(－)

対 策 (1) 育苗は風当りの弱いところで行い、できるだけ傷をつけないように管理するとともに、軟弱徒長にならないよう注意する。

- (2) 圃場の排水を良くするとともに、トンネル内部が過湿にならないように換気に留意する。
- (3) ベタがけ被覆しているところでは、降雨が続くと多発するおそれがあるので注意する。
- (4) 強風を伴う降雨が続いた後には薬剤防除を実施する。また、結球期から収穫期にかけて発病が増加するので、下葉に発生が見られたら早めに防除する。

5. モザイク病（えそ輪紋症状を含む）

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 11月下旬の年内どりでの発生量はやや少なかった。（－）
(2) 11月下旬のアブラムシ類の発生は認められなかった。（－）
(3) 防除員報告では発生がやや多い地区があった。（＋）
(4) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での11月の誘殺数はやや多かった。（＋）
- 対 策 (1) 発病株は早期に抜き取り適正に処分する。
(2) アブラムシ類の防除を行う。また、定植時には、アブラムシ類を対象に灌漑処理や粒剤施用をする。

－イチゴ（施設本圃）－

1. うどんこ病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 11月下旬の発生量は平年並であった。（±）
- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぎ、発病を認めたら、発生初期から5～7日間隔で薬剤防除を行う。
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アブラムシ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 11月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での11月のアブラムシ類の誘殺数はやや多かった。（＋）
(3) 12月の気象は気温がほぼ平年並の予報である。（±）
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. コナジラミ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 11月下旬の発生量は平年並であった。（±）
(2) 12月の気象は気温がほぼ平年並の予報である。（±）
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 圃場内に黄色粘着シートを設置し発生状況を把握し、発生初期から薬剤防除を行う。

- (3) 多発すると防除が困難になるので、気門封鎖剤などの蜜蜂への影響が小さい薬剤を用いて低密度時から防除する。
- (4) 一部の薬剤に対して抵抗性の発達が認められるので、作用性の異なる薬剤で防除する。

4. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 11月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 12月の気象は気温がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 発生が局所的な場合には、気門封鎖剤のスポット散布を行う。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

－野菜、花きの共通害虫－

1. ハスモンヨトウ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**
(令和6年9月27日付け病害虫発生予察注意報第3号発表)
- 根 拠 (1) 11月下旬の発生量は、キャベツ、レタスではともに認められず(－)、年内どりブロッコリーではやや少なく(－)、年明けどりブロッコリーでは多かった(＋)。また、一部の地域の野菜、花き類で発生量が多かった。(＋)
(2) 防除員報告では各種野菜類で発生量の多い地区があった。(＋)
(3) フェロモントラップでの11月の誘殺数は多かった。(＋)
(4) 12月の気象は気温がほぼ平年並(±)、降水量が平年並か少ない(＋)予報である。
- 対 策 (1) 圃場周辺の雑草は増殖源となるため、発生前からの除草に努める。
(2) 若齢幼虫は集団で食害するため、被害葉は表皮だけを残して白色になっているので、本圃の果菜類等ではこれらを発見したら摘葉するとともに薬剤防除を行う。
(3) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
(4) 中老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、体長1cm以下の若齢幼虫期に薬剤防除を行う。
(5) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. コナガ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少
- 根 拠 (1) 11月下旬の年内どり、年明けどりブロッコリー、キャベツでの発生は認められなかった。(－)
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでの11月の誘殺数はやや少なかった。(－)
(3) 12月の気象は気温がほぼ平年並(±)、降水量が平年並か少ない(＋)予報である。
- 対 策 (1) 苗床は防虫ネットで被覆し、成虫の侵入防止対策を講じる。
(2) 定植時に灌注処理や粒剤施用するとともに発生初期から薬剤防除を行う。

- (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. タバコガ類（主にオオタバコガ）

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

（令和6年11月7日付け病害虫発生調査速報第3号発表）

- 根 拠 (1) 11月下旬の発生量は年内どりレタス、年内どりブロッコリーともに多く（+）、年明けどりブロッコリーでは発生を認めなかった（-）。また、一部地域の野菜・花きで発生量がやや多かった。（+）
(2) 綾歌郡綾川町のフェロモントラップでのオオタバコガの11月の誘殺数は多かった（+）。
(3) 12月の気象は気温がほぼ平年並（±）、降水量が平年並か少ない（+）予報である。
- 対 策 (1) 施設の出入口やサイド換気口等の開口部に防虫ネットを張り、侵入を防止する。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 花蕾や成長点を食害するので被害が見えたら直ちに薬剤防除を行う。
(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。
・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>

